



Title	田島周二の遁走 : 『グッド・バイ』論
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 64-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田島周二の遁走——『グッド・バイ』論

斎藤理生

一 問題の所在

一九四八年六月一日、太宰治は「朝日新聞」に小説の連載を始める直前に失踪。一九日に遺体を確認された。書きかけの小説『グッド・バイ』は、二一日に、東京本社から発行された「朝日新聞」に第一回、大阪本社発行の「朝日新聞」では第二回までが、追悼文と共に掲載された。のち、手を入れた校正刷および原稿が残されていた第一三回までが「朝日評論」一九四八年七月号に一括掲載される運びとなった。

研究史において『グッド・バイ』は、未完であるゆえ、単体で論じられることは少なかった。作品論の形式で書かれていても、太宰の死と絡めたり、⁽¹⁾『人間失格』との比較を通じて論じられたりするものが一般的であった。⁽²⁾『グッド・バイ』に『人間失格』からの展望を

はかった文体のありよう」を見出す千葉正昭が、その論の冒頭に記した「中絶となった作品を論ずることは、困難だが、残された物語空間から抽出できる問題を、他作品との比較検討により、その特質として紡ぎ出すことは可能だ」という言葉は、この間の事情をよく物語っている。⁽³⁾〈笑い〉が一篇を覆っているという指摘も早くからあったが、それも死や『人間失格』との対比において語られてきた面が強く、⁽⁴⁾〈笑い〉を生み出す構造が具体的に分析されることはなかった。

たしかに『グッド・バイ』は、全八〇回の予定だったものの、実際に書かれたのはその四分の一にも満たない。太宰がこの小説にへおわりをもちたことができなかったことは、この小説の論じにくさにつながっている。しかしへはじまりは確かに設けられ、新聞や雑誌を通じて同時代の読者にも受容され、⁽⁵⁾現在は新潮社や角川書

店において複数の短篇を収録した文庫本のタイトルにも選ばれているほど、『グッド・バイ』が存在を認知されていることも事実である。ならば、へはじまりを起点にどのような物語が生成され、どこへ伸びてゆくものとしているのかを検討することはできるはずだ。この小説の場合、タイトルそのものが作者の死による中断という文脈を強調している面があるが、没後六〇年を経た現在だからこそ、そこからいったん距離を置き、今ある形で一篇の構造を分析する必要があると考える。

二 構想の変化

一九四八年当時、朝日新聞東京本社学芸部長であった末常卓郎によれば、小説連載の依頼をしたのは「三月のはじめ」であり、「太宰がこれを書き始めたのは、五月の十日ごろだつたろう」。末常はそこで太宰から、次のような「すでに出来ていた構想」を聞かされていたという。

彼が描こうとしたものは逆のドン・ファンであつた。十人ほどの女にほれられているみめ麗わしき男。これが次々と女に別れて行くのである。グッド・バイ、グッド・バイと。そして最後に、あわれグッド・バイしようなど、露思わなかつた自分

の女房に、逆にグッド・バイされてしまうのだ。

一方、同じく朝日新聞に勤めていた北鬼助は、「二月の二十日前後」に太宰と会談し、「小説の話を、ほぼ確約した」ときのことを、次のように回想している。^⑦

帰り際に、——小説の構想は……——と、こころみに問うと、
——グッド・バイ、一人の男が、戦後、過去の一切のものと、
権威、権力、宗教、道徳、習慣、生活、女……と、訣別してゆく。

一切のものを、次々と振り捨てて、生きてゆく……。

ところが、

——最後に、自分の振り捨ててきたものの総量に、つまり現実には、彼自身が振り捨てられる……。

つまり、グッド・バイというわけさ……——。

という返事であつた。

末常と北の文章の間には齟齬がある。太宰が末常に語ったとされる内容には、女たちと別れてゆくという物語の筋が前面に出ており、そこに時代や社会への意識をうかがうことは困難である。それに対

して、北に語ったとされる内容は、「戦後、過去の一切のものと(中略)訣別してゆく」という一文に代表されるように、時代や社会への意識が強い。ここからは、『グッド・バイ』が戦後社会全体に対する批判を含んだ小説として構想されていたことが推測される。

注目されるのは、現在読むことができる『グッド・バイ』の草稿のバリエーションも、このような差異に対応しているように思われることだ。

草稿A

「主人公の名前などは、何だつてかまはない。読みたいのがよい。

山本、……胸の中の「小」小さい水泡のやうなものが、ブツ「リ」ツと幽かな音を立てて破れたやうな気持であつた。

何かしら、変つて来た。終戦以来、三年経つて、何かしら、變つて来た。

三十四歳、オペリスク社編集長、田島周二の

草稿B

何かしら、變つて来た。終戦以来、三年経つて、何かしら、變つて来た。

三十四歳、雑誌「オペリスク」編集長、田島周二。もともと、抜

け目の無い男で、「オ

草稿C

文壇の、或る老大家「の逝去した日に、」が亡くなつて、その告別式の「□」はじまる頃から、「終り頃から」「に」「には」「朝」「から」「昼頃」雨が降「つてゐた。」リはじめた。早春の雨である。

その帰りに、二人の男が相合傘で歩いてゐる。いづれも、その老大家には

※「」は「抹消された表現を示す」。棒線は「抹消後の訂正、ないしは行間等」に書き加えられた表現であることを示す⁽⁸⁾。A→Cの記号は論者が付した。

AからBを経て、決定稿に最も近いCに至る変化のプロセスについて、「時代認識を正面に打ち出した「社会小説」の可能性を、作者自ら薄めていく過程がうかがえる」という指摘がある⁽⁹⁾。が、時代や社会への意識は、冒頭には見られないにせよ、作品の他の部分には認められると思われる。『グッド・バイ』の作者は、草稿AやBのように最初から「時代認識」を前面に押し出すことを止めたただで、作中の細部から仄めかす方法を選んだのではないだろうか。

三 新宿闇市の一九四八年

『グッド・バイ』第一回は「変心（二）」という副題を伴っていた。そこでの田島の「終戦以来、三年経つて、どこやら、変った」意識をあらためて確認しよう。

けれども、それから三年経ち、何だか気持が変つて来た。世の中が、何かしら微妙に変つて来たせるか、または、彼のからだ、日頃の不節制のために最近めつきり痩せ細つて来たせるか、いや、いや、単に「とし」のせるか、色即是空、酒もつまらぬ、小さい家を一軒買ひ、田舎から女房子供を呼び寄せて、……といふ里心に似たものが、ふいと胸をかすめて通る事が多くなつた。

田島の変心には、「世の中」の「何かしら微妙」な変化が反映していることがわかる。細谷博は『グッド・バイ』のはじめで「何度も『変化』が言われていること」に着目し、「この面白おかしい作品が新たな可能性を示すと同時に、ある危機感のようなもの——世の中と人間の動きの渦中にある、はたしてこのままでよいのか、という不安をもあらわしていたのだ、と感じさせる」という興味深い見

解を示している。⁽¹⁰⁾ 実際、ここで田島が感じ取っている「世の中」の変化は、一九四八年という作品発表時の時代設定と密接に関わっていたようなのだ。

もちろん、一口に一九四八年という時代と言っても、その意味あいは、生活する場所や職業、階層によって大きく異なるにちがいない。が、田島やキヌ子のような、新宿で闇商売をしている者にとつての一九四八年ということに絞れば、そこに見えてくる現実の景色は、虚構を理解する参考になるであろう。

松平誠によれば、⁽¹¹⁾ 食料品を供給する後背地と結びつき、鉄道沿線の住宅地と官庁街の接点でもあった新宿は、「ヤミ市の発祥地」であった。ところが、「一九四八年以降になると、こうしたなはだ原始的な物資流通のやり方に代わつて、ブローカーによる大口の取引が活発になり、大量輸送による組織的な流通が行われるようになったといわれる。（中略）ものによつては統制を外されるものも増えていき、ついで料飲店の禁制も解かれ、ヤミ市の使命は終りに近づいていく」。

つまり一九四八年は、新宿の闇市が大きな変貌を余儀なくされてゆく時代であったのだ。⁽¹²⁾ 言うまでもなくそれは、田島だけでなく、キヌ子の商売である「かつぎ屋」も、遠からずして難しくなつてくることを意味する。

『グッド・バイ』発表当時まで、「かつぎ屋」には相応の需要があったようである。連載直前の一九四八年五月一八日付「朝日新聞」には、「トウキョウ散歩」朝一番の銀座マン」という記事があり、「夏時間午前六時、ハットリの大時計が人通りまばらな銀座八丁にカン／＼と鳴るころ、異形の群が築地方面から姿を現わす、魚河岸にむらがる『非合法配給員』の御出勤である」と「かつぎ屋」たちの様子が描かれている。だがこのような「かつぎ屋」たちは四八年以降、ほどなくして姿を消すことになったらしい。⁽¹³⁾

一方、この時期になると、一部の人々は徐々に身づくろいに気を使い始めていた。一九四八年五月二〇日付「朝日新聞」は、「女はスカートを長くし、男はパーマメントで前がみを立てる。これが東京の流行になる形勢だ。(中略)この伊達男たち、まだ銀座あたりの一流店にはあんまり現れないが、場末の美容院では日に必ず二、三人ぐらいパイプなどくわえてズイと入って来るそうだ」と、東京で男性のパーマが流行し始めていることを報じている。このような文脈において小説を読めば、キヌ子を一目見て、田島との関係をあきらめた美容師の青木さんには、その銀座一と謳われる腕前ゆえに、このあと次々に仕事が無い込んでくる可能性が高い。

逆に、「かつがなきやおまんまが食べられ」ないキヌ子は、本業でしだいに収入を失ってゆくだろう。もつとも、田島のように儲けた

金を湯水のごとく使うのではなく、粗末な家に住み続ける一方、押し入れに金品をため込んでいるキヌ子は、自らを取りまく経済状況の変化に田島よりも敏感であったにちがいない。そのようなキヌ子にとつて、田島との「行進」は、きわめて重要な収入源として意識されているはずだ。語りが基本的に田島に焦点化されているために読者には見えにくいのが、キヌ子は軽い気持ちで「行進」に付き合っているわけではない。そのふてぶてしい態度も、交渉を有利に運ぶために意識的になされていると見るべきである。

冒頭に、同年三月六日に死んだ菊池寛を想わせる老大家の告別式を描いていることや、「コールド・ウォー」という副題が第二・一三回に使われていることをとつても、新聞小説という形式を考慮してであろう、太宰治は『グッド・バイ』に同時代性を積極的に持ち込んでいる。⁽¹⁴⁾「目から鼻に抜けるほどの才物」である田島がいち早く手を洗おうとしているのも、キヌ子が田島にあきれつつも付き合うのも、闇商売が難しくなりつつある時代状況を反映しているのである。

だが、時代の変化を敏感に感じ取っている割には、田島の通走が容易には成功しがないように感じられるのはなぜであろうか。

四 田島周二の変心

四・一 別れの自己目的化

『グッド・バイ』第一回において、田島は生活を一新させるために、次のように考えていた。

もう、この辺で、開商売からも足を洗ひ、雑誌の編集に専念しよう。それに就いて、……。

それに就いて、さし当つての難関。まづ、女たちと上手に別れなければならぬ。思ひがそこに到ると、さすが、抜け目の無い彼も、途方にくれて、溜息が出るのだ。

田島は愛人たちと「上手に別れ」る方法をなかなか思いつくことができない。そんな折り、知り合いの文士に、「すごい美人」を見て妻の振りをさせ、愛人たちを訪問することで、彼女たちに別れを自覚させるというアイデアをもらう。だが「すごい美人」など都合よく見つからないために、田島は悩む。問題は、この第三回に至るころまでに、田島の苦悩が急速に深まっていることである。

かれはもう、絶望しかけて、夕暮の新宿駅裏の開市をすこぶ

る憂鬱な顔をして歩いてゐた。彼のいはゆる愛人たちのところを訪問してみる気も起らぬ。思ひ出すさへ、ぞつとする。別れなければならぬ。

注意したいのは、妻子を呼び寄せたいという里心、雑誌の編集に専念しようという意欲などは背景に退き、愛人たちと「別れなければならぬ」という言葉のみが前景化して、強迫観念のように田島を脅かしていることである。連載第一回では「生活を一新させる」という目的のための「さし当つての難関」に過ぎなかつたはずの「愛人たちと別れる」行為が、第三回では目下の懸案の課題になつてしまつてゐる。目的を達成するための段階が、目的それ自体に変わつてしまつてゐるのである。

四・二 女性観のゆらぎ

田島は永井キヌ子と出会うことで、文士に教えられた方法が実践できると思つて喜ぶ。しかし田島が思い描いたように事はうまく運ばない。それどころか、キヌ子と接しているうちに、田島はたびたび認識を改めることを余儀なくさせられる。

たとえば、田島に焦点化された語りでは、キヌ子の大食を目の当たりにして、「女は誰でも、こんなに食ふまい。いや、それとも？」

などと語られる。つまり、田島は「女」一般に驚くようになっていく。ささいな部分ではあるが、愛人を大勢かかえ、「女」たちのあしらいに自信を持っていたはずの田島が、キヌ子を知ることによって、それまでの女性観を揺るがせられていることは見逃せない。

だが、美人が実は大食である、というのは、意外なようで、いかにもありふれたエピソードではないだろうか。たとえば一九四〇年のベストセラーである大迫倫子『娘時代』（二九四〇・五、偕成社）所収の「女性と食慾」の一節「美人はくひしんぼう」には次のような叙述がある。⁽¹⁶⁾

私は、きれいな御婦人はずいぶんといつても過言ではないほど、お友だちにもつてゐるのだけれど、その彼女たちの一致した共通点といふのは、だれもかれも大変な食ひしんぼうであること、そしてなにかといへば「お腹がすいた」といふ口癖なのである。（中略）ビーフステーキをばくついたそのすぐあとで、苺のショートケーキをたべ、お茶をのみ、映画でものぞいて出てくると、「あ、お腹がすいた」といふわけで、お寿司をつまみ、おしるこをたべ、まだたべたいけれど我慢するわけで、やつとこせつとこ終幕なのである。

なにも太宰がこの大迫の文章を種本にして『グッド・バイ』のキヌ子を造形したなどと言うつもりはない。だが、美人の大食が、この時期すでにひとつの類型になっていた可能性はうかがえるはずだ。⁽¹⁷⁾にもかかわらず、田島は驚かされている。どうやら田島は「女」をわかっていると思っているものの、その「女」なるものは、「虚栄心」の強い彼を満足させる、限られた女性たちだったようなのだ。こうした田島の女性観は、彼の視野の狭さや思いこみの強さを暗に語っているのである。⁽¹⁸⁾

四・三 「色男」としてのプライド

田島は、十人ちかくいる愛人たち全員と別れるためにキヌ子を使うおうとしていた。ところが、最初の一人である青木さんと別れた直後、あまりにも「ムダ使ひ」に耽るキヌ子に堪えきれず、彼女を「遠慮深くて従順で質素で小食の女に変化させ」るために、ものにしようとしてしまう。女たちと別れるために行動を共にすることはなった女を手に入れようとする。この行為が本末転倒であることは言うまでもない。⁽¹⁹⁾

しかも、恋愛を「ばからしい」と思っているキヌ子に田島は手焼くのだが、そこであきらめるのではなく、「ここで敗退しては、色男としての名譽にかかはる。どうしても、ねばって成功しなければ

ならぬ」と考える。またしても「うねばならぬ」という強い規制が働いていることに注意したい。すなわち、田島は生活を変えという当初の目的を二重三重に忘れていつて、専ら自分のプライドのためにキヌ子をものにしたいと思うようになっていのである。

さらに、こうした変貌ふりと合わせて押さえておきたいのは、田島がキヌ子の家に泊まろうとするものの、「だめ、だめ、お帰り」と拒否され、その後殴打さえされてしまうことだ。つまり、この時点で田島はすでに「ドン・ファン」たりえておらず、「グッド・バイ」されてしまう存在になっているのである。その意味で『グッド・バイ』は、太宰が末常に語っていた構想——最後に田島が「グッド・バイ」されてしまうという筋——とは、この第十一回の時点で別のものになっていると言わざるを得ない。

四・四 金銭欲の前景化

しかし田島の変貌は止まらない。このあと田島は、「色男」としてのプライドを守るためですらなく、ただキヌ子に使った金を取り戻すために、彼女をいかに利用するかを頭を働かせるようになる。

田島は、しかし、永井キヌ子に投じた資本が、惜しくてならぬ。こんな、割の合はぬ商売をした事が無い。何とかして、彼女を

利用し活用し、モトをとらなければ、ウソだ。

キヌ子に再会した当初は「商売の話ぢやない」と語っていた田島が、今はあくまで「商売」として考えようとしている。しかし、「モトをと」ろうと思って訴えた「思想戦」は通じない。自分が妻子を呼び寄せることを「どう考へますか」と問う田島に対し、キヌ子は「なにも考へない」と答える。賛成でも反対でもなく、議論を共有しようとするのだ。また、田島は「僕は、道徳は、やはり重んじなけりやならん、と思つてゐるんです」だの、「人間には皆、善事を行はうとする本能がある」だのと、倫理性を押し出し「へこころ」に訴えようとする。しかし、キヌ子は「おしつこが出たい」という「へからだ」の事情をもつてその説得を撥ねつける。ゆえに田島は結局、思想ではなく「にはかに変じて金の話」をせざるをえなくなり、かつキヌ子が要求するに近い金額を払わされるのである。

ここに到ると田島は、「色男」どころではなく、「色気のほかにいまはむらむら慾気さへ出て来て」しまったがゆえに兎に手もなく騙されてしまった「カチカチ山」(『お伽草紙』一九四五・一〇、筑摩書房)の狸に似てきているとさえ言えるだろう。⁽²⁰⁾

四・五 「怪力」の利用

田島はキヌ子にあらわれ続けた結果、「かうなつたら、とにかく、キヌ子を最大限に利用し活用し」「思ひ切り酷使しなければ、損だ」という見解に至る。だが、その後に思いついた方法は、キヌ子の美しさではなく「怪力」を利用しようとするものであって、「すごい美人」の本妻を愛人たちに見せつける、という当初の計画とは大きく異なるものであった。

二人目の愛人水原ケイ子に接する前に、田島は会見の模様を次のように思い描く。

病人に優しい見舞ひの言葉をかけ、さうしてお金をそつと差し出す。兵隊の兄も、まさか殴りやしないだらう。或ひは、ケイ子以上に、感激し握手など求めるかも知れない。もし万一、自分に乱暴を働くやうだつたら、……その時こそ、永井キヌ子の怪力のかげに隠れるといい。

田島は都合よく考え、「まさに百パーセントの利用、活用」と自惚れる。だが、この想像の中には、キヌ子の美貌を利用した効果はいっさい想定されていない。「金ですむ事なら、わけないけれども、女たちが、それだけで引下るやうにも思へない」からこそ悩んでいたは

ずなのに、ケイ子とは優しい言葉と金だけで別れられると考えている。そしてキヌ子を連れてゆく意味はもはや単なるボディガード以上のものではなくなっているのである。

しかし、「怪力」を利用するというのは、復員兵の兄がいるケイ子の場合とはかく、他の女性たちと別れる手だてにはならないと推測される。もともと文士から教えられた方法は、個々の愛人の事情を鑑みる必要なく、どの愛人でも美人の本妻を前にしては引き下がらざるを得まい、という一般性と効率のよさが大きな利点であったはずだ。だが田島はキヌ子をそのように利用することができなくなってきた。事ほど左様に、彼は当初の計画を見失ってしまったのである。

四・六 田島からの距離

『グッド・バイ』は「彼は、めつきりキヌ子に、ていねいな言葉でものを言ふやうになつてゐた」という一文をもつて終わっている。小説最後の一文が、田島の口調の変化を示す文であったことは偶然ではない。この小説では、田島周二の変貌が執拗なまできくり返し描かれており、一篇は、時代の推移をいち早く察知して主体的に変わろうとした男が、期せずして変えられてゆく物語になっているのだ。

『グッド・バイ』は、少なくとも序盤では、語り手に焦点化されて内面が説明される田島に共感を覚えつつ読まれることが多いと推測される。が、ここまで見てきたように田島の目的がひどく揺れ動くゆえ、読者はしだいに彼に隔たりを覚えざるを得なくなるだろう。

ただ、その隔たりは、この小説を喜劇として読むために必要なものでもある。この小説には「おそれいりまめ」のような駄洒落も含まれているが、それ自体は喜劇として読むことを促すサインに留まっておき、〈笑い〉の重心は、そうした「ゲスな駄じやれ」を言われているおキヌ子から離れられない田島の姿にあるにちがいない。田島は目の前のキヌ子への対応にばかり追われて、「色男」としてのプライドも、金儲けの達人としてのプライドも壊されてゆく。生活を一新させることから愛人たちと別れること自体に目的がズレてゆくのに伴って、田島じしんが変わってしまい、最後にはキヌ子への口調が変わっていることにも無自覚であるらしい。田島に焦点化しつつ物語を進める語り手も、序盤では「闇商売の手伝ひをして、道徳的にも無いものだが」程度の揶揄に留まっていたのが、しだいに「女に對して常に自信満々の田島ともあらう者が、こんな乱暴な恥知らずの、エゲツない攻略の仕方を考へつくとは、よつぽど、かれ、どうかしてゐる」などと非難するようになる。そのように主人公を相対化する視座が設けられてゆくことで、一篇は読者を共感よりも〈笑

い〉へと誘ってゆくようになるのである。

五 『グッド・バイ』の〈未来〉

一三回分までを読む限り、この小説は、女たちに「グッド・バイ」してゆく小説になどなつてはいないし、この後もなりそうにない。あえてタイトルにかこつけて言えば、田島が「色男」であり抜け目なく稼ぐ男でもあるというそれまで抱いていた自己像に、あるいは愛人たちと別れるとかキヌ子をものにするとか途中で派生してきた目的に、次々とグッド・バイしていかざるをえなくなつてゆくのがこの小説である。

田島の愛人たちからの遁走は、この後も困難が予想される。振り返れば、田島は小説の冒頭で「退屈してゐた」初老の文士からさえ逃げられなかった。このことは、愛人たちからの逃亡の困難をも予兆していると思われる。それが死という形を取つても不思議ではない。冒頭で文士が田島に「まさか、お前、死ぬ気ぢやないだらうな。実に、心配になつて来た。女に惚れられて、死ぬといふのは、これは悲劇ぢやない、喜劇だ。いや、フアース（茶番）といふものだ」と言っていたことを考えれば、全体を覆う〈笑い〉のトーンと死は矛盾しない。田島と同様に「色気」と「慾気」にまみれた「カチカチ山」の狸が、兎に殺されてしまった例もある。それに、

『グッド・バイ』は「女が好きだった」老大家の告別式から始まる小説であった。この作品において最初に提示される女との別れ方は死という形だったのである。

ただ、読み手をしてそのような物語の〈未来〉を想像させるのは、単に『グッド・バイ』が未完だからではない。ここまで明らかにしてきたように、この小説が、敗戦後三年という過渡期に時代を設定し、新宿の闇市という刻々と変化しつつある場所を舞台の中心に据え、冒頭で生活の変化を願い、その後も目的や意志を次々に移ろわせてゆく主人公を持つためなのである。

注(1) たとえば伴悦は「グッド・バイ」論(『太宰治3 怒れる道化師』

一九七九・四、教育出版センター)で、「死期にのぞん」だ作者が、「他のために精いっぱいサーヴィスを提供することで、むしろ逆に他からの「審判」に自らを委ねた」作品だとしている。

(2) たとえば浦田義和は「グッド・バイ」通俗(『太宰治 制度・自由・悲劇』一九八六・三、法政大学出版局)で、「人間失格」の「暗」に対する「明」としての「グッド・バイ」という観点から読解している。また、宮野光男は「太宰治を読む——グッド・バイ」を中心にして——(佐藤泰正編『梅光女学院大学公開講座論集 第45集 太宰治を読む』一九九二・〇、笠間書院)で、「グッド・バイ」の主人公田島周二は、「人間失格」の葉蔵を受け継いだ存在である」と述べている。

(3) 千葉正昭「グッド・バイ」——文体から——(『解釈と鑑賞』一九九二・九・九)

(4) 白井吉見は「展望」「展望」(一九四八・九)で、次のように述べて

いる。「人間失格」のやうな、彼の文学の集大成といふか、総決算といふか、さういふ意味ではめて遺書的な性質の強く出てゐる作品が最後の作といふことだつたら自然といへようが、「人間失格」のあと、死の直前に「グッド・バイ」のやうな作品がかれたことは誰にとつても、奇異の感がするにちがひないと思ふ。(中略)だから「人間失格」が絶筆とならずに「グッド・バイ」がそれになつたのは、わからぬことではないが、それにしても、一応奇異に感ずるのは、「グッド・バイ」の、あの野放図もない明るさと笑ひである。」

(5) 同時代評に関しては山内祥史編『太宰治著述総攬』(一九九七・九、東京堂出版)を参照のこと。他にも、武田泰淳『もの喰ふ女』(「玄想」一九四八・一〇)や、田中英光『さようなら』(「個性」一九四九・一一)など、同時代小説でも「グッド・バイ」は言及されている。

(6) 末常卓郎「グッド・バイのこと」(『朝日評論』一九四八・七)

(7) 「現代の長悼——太宰治を悼む」(『人間喜劇』一九四八・八、ただし引用は山内祥史編『太宰治著述総攬』より)

(8) 引用は『太宰治全集13』(一九九二・五、筑摩書房)より。

(9) 日本近代文学館編『図説 太宰治』二〇〇〇・五、ちくま学芸文庫

(10) 細谷博「太宰治」一九九八・五、岩波新書

(11) 『ヤミ市 幻のガイドブック』一九九五・七、ちくま新書

(12) 『東京都江戸東京博物館調査報告書 第2集 常設展示製作に伴う調査報告2(大型模型2)ヤミ市模型の調査と展示』(一九九四・一〇)の「調査目的とその成果」(松平誠執筆)には、「一九四七、一九四八年夏の食糧危機を経過した一九四八年秋以降は、ようやく都民の生活が一応の安定を見、ヤミ市も物資欠乏時代の生活必需品市場から、都市の盛り場へとその顔を変えていった。そして、多くのヤミ市は、都市計画の発足とともに、一九五〇、一九五一年頃から急速にその姿を消していったのである」という指摘がある。

- (13) 松平前掲書には、「一九四八年ころまでは、都市と産地との間の流通が滞ったため、列車・電車を利用して物をヤミで動かし、サヤを稼ぐ商売が盛んだった。食料需給が円滑になり、衣料を中心に商社機能が復活すると、かつぎ屋たちは忽然と姿を消していく」とある。
- (14) 子どもにバーマをかけさせる親まで出たという。「親バカ二景」(『朝日新聞』一九四八・九・二七) 参照。
- (15) 「コールド・ウォー」の流行は、長谷川直美『私の新語辞典』(一九四八・一一、新日本教育文化研究所)や、第一政経研究所編『改修新版 新聞雑誌語辞典』(一九四八・一二、第一出版)に収録されていることで確かめられる。『私の新語辞典』では「冷い戦争」の項に取りあげられ、「英語のコールド・ウォー」と説明されている。また『改修新版 新聞雑誌語辞典』でも「冷い戦争」の項で、ソ連とアメリカが対立し「世界を二分していまや外交に経済に武器をもたない戦争をつづけてある」ことだ、と現在形で説明されている。また、「サンマアタイム」という記述が、太宰が使用していた「昭和二十三年度版」手帳の「43」の頁に、「オソレイリマメ」「フク水の陣」など、『グッド・バイ』に関係する言葉と共に書かれてあることも注目される(『資料集 第二輯 太宰治・晩年の執筆メモ』二〇〇一・八、青森近代文学館)。サマータイムは当時「夏時間」(前掲『私の新語辞典』)「サンマアタイム」(前掲『改修新版 新聞雑誌語辞典』)などと呼ばれ、一九四八年四月二十八日から試験的に施行されていた。
- (16) 著者の大迫倫子は、元「婦人画報」の記者で、昭和十五年当時、二五歳。若い娘の言い分を大胆に述べたものとして、発売直後から爆発的な売れ行きを見せ、六月には七十五刷、翌年一月には二百六十刷となり、十二月に続編として出された『娘の真実』もまた一月には五十五刷、双方で五十万部売れたというが、内容が自由主義的に過ぎるというので一年後に絶版となっている(『小谷野敦 恋愛の昭和史』二〇〇五・三、文藝春秋)。
- (17) 阿部昭『読書好日』(『東京新聞』一九八八・六・二〇)には、「キヌ子や房子は相当な特異体質であるとしても、昭和二十三年頃の恋愛描写には、こんなメニユーが不可欠であったのだらう。成瀬巳喜男か豊田四郎か小津安二郎かの戦後映画にも、美しく上品な人妻が、外出から帰って独り茶の間にぶつ坐り、すさまじい形相で飯を掻っ込むシーンがありましたっけ」という指摘がある。
- (18) 田島の視野の狭さや思いこみの強さは、この後の青木さんとの関係において「田島の如きあか抜けた好男子の出没は、やはり彼女の営業を妨げるに違いないと、田島自身が考へてゐる」といった語り手の言葉によっても強調されている。
- (19) この点については伴悦前掲論に「考えてみると離別の手段にキヌ子を雇っておきながら、ものにしてやろうなどということ自体奇妙な話で、おのずと破滅への航跡を物語っている」という指摘がある。
- (20) ちなみに「カチカチ山」との類似は、浦田義和前掲論に、田島は狸のように「自己戯画化」されている、という指摘が既にある。だが、ここでは太宰の「自己」を前提にした「戯画」という立場は取らないし、より細部の対応を問題にしている。